

契機になったと思います。

最後になりましたが、この度の JNS-SfN Exchange Travel Award の運営に際しご尽力下さった JNS および SfN の関係者の皆さま、そして日頃よりご指導いただいている池谷裕二先生をはじめ、各所でお世話になった諸先生方へ、この場を借りて心より御礼申し上げます。

参 加 記

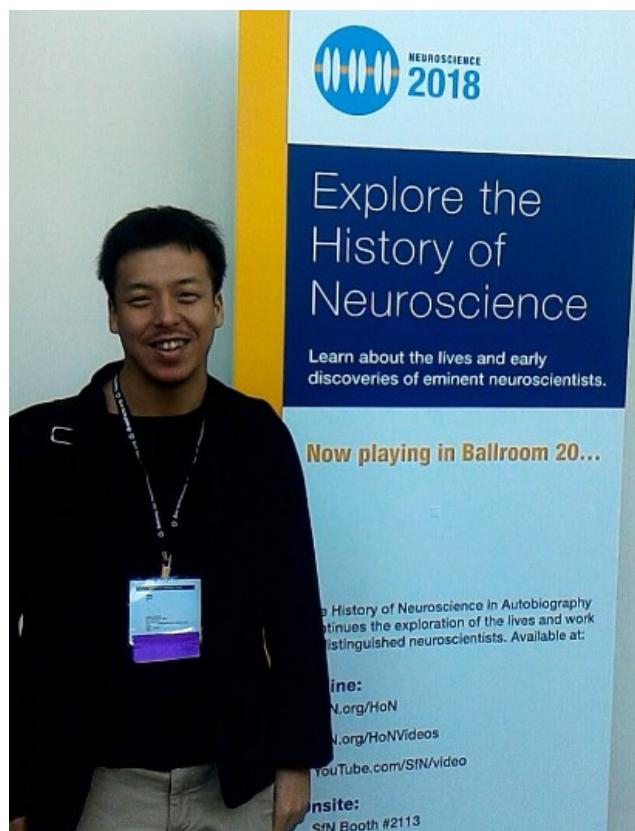
SfN 参加記

東京大学大学院医学系研究科
システムズ薬理学教室
博士課程4年 村上 達哉

2018年11月3日から7日までカリフォルニア州サンディエゴで開催された北米神経科学会に参加してきました。北米神経科学会には二年前に同じサンディエゴで開催された際にも参加しており、今回が二度目の参加となります。この二年の間でサンディエゴに起こった変化といえば、ドックレスタイルのシェア電動スクーターが爆発的に普及し街の至ることで電動スクーターが置かれていることです。筆者も早速利用し、毎日宿からの往復15分ほどさわやかなカリフォルニア風を感じながら学会会場に通っていました。モバイルアプリをインストールするだけで非常に簡便に使用出来るようになっており、タクシーを利用するよりもはるかに安価なので皆様もサンディエゴで開催される北米神経科学会に参加される場合は是非とも利用されると良いと思います。

本題の学会ですが、初日はインターナショナルトラベルアワードの受賞者が参加する International Fellows Orientation Session に参加することから始まりました。日本神経科学学会をはじめとする世界各地に存在する現地の神経科学会から選抜された優秀な若手研究者たちが参加します。特に南米の神経科学会は力を入れているのか、セッション参加者の大半はアルゼンチン、ブラジルをはじめとする南米の出身者でした。内容は過去の体験記に書かれている内容とおそらくほぼ同じで、主には学会に参加する心得の様なものの説明を受けました。歩きやすいシートを履きなさい、興味を絞って選んだセッションに最後まで参加しなさい、と言った具体的な事柄まで事細かに説明を受けました。また、エレベータートークの練習と言うことで三人ほどを順番に簡単な自己紹介をし合うという手短なトレーニングを行いました。スマートトークはおしゃべり好きなアメリカ人でも苦手に感じる人が少なく

ないと言います。しかしながら同じ神経科学の研究者同士なので話を簡単に盛り上げることが出来るということが実感できました。セッション全体を通して、司会者の方も毎年担当をしているからか慣れている様子で冗談を混ぜながらの和やかな雰囲気で終わりました。



学会会場メインホールの前にて

その夜に行われたポスターセッションは、ご飯も提供されてのカジュアルな雰囲気の中でのセッションとなりました。アメリカ国内の研究者を対象としたトラベルアワードの受賞者と同じ会場で行われており、インターナショナルトラベルアワード以外の人とも多く交流ができました。筆者のポスターに興味を持っていただいた方が途切れなく訪れていただけたので、自分の研究の話を主にしていましたが、将来のキャリアの話やラボの運営の話など参考になる話も聞くことが出来ました。

今回はオフィシャルのポスター発表もあったのですが、その際には同じ研究分野で二年前に会ったことのある人たちが発表を聞きに訪れてくれました。筆者の論文を読んでいる方も少なからずおり、君の論文を読んだよと声をかけてくれた際は非常にうれしく思ったものです。この様に自身の知名度を上げ、人脈を築き上げていくことが今回の学会の最大の目標であったと言つても過言ではない

ため、その点では目標をしっかりと達成できたのではないでしようか。

北米神経科学会のような大人数の学会の魅力の一つは、無数のサテライトイベントがあり、その様な場所で社交を行えることでしょう。時差ボケの中で夜中までお酒を飲むのは体力的に大変かもしれません、毎日でなくとも積極的に行くのが良いでしょう。また、留学先の候補として考えている教授と連絡を取る絶好のチャンスでもあります。筆者は本学会に参加する前に事前に興味のあるラボの先生と連絡をとり、ランチを取りながら研究の議論を行いました。その結果、論文だけでは得られないラボの情報が得られ、博士後研究員のオファーを頂くこともできました。総括すると、非常に充実した学会となったと思っています。今回この様な機会を下さいました日本神経科学学会を始めご支援下さいました方々に心より感謝申し上げます。

参 加 記

Cold Spring Harbor Laboratory Meeting "Molecular Mechanisms of Neuronal Connectivity" に参加して

名古屋大学環境医学研究所神経系分野 2

博士課程 2 年 向井 康敬

非常に濃密で有意義な 5 日間でした。アメリカの Cold Spring Harbor Laboratory (CSHL) で 2018 年 9 月 25 日～29 日に開催された meeting 「Molecular Mechanisms of Neuronal Connectivity」 に、私は新学術領域「脳情報報動態」のご支援で参加させていただきました。CSHL では様々なテーマの meeting が 1 年を通じて開催されており、本 meeting はその 1 つです。約 200 名が一堂に会し、途中 2 回のポスター発表の他はすべて口頭発表で、連日午前 9 時から夜は長いと午後 11 時近くまで白熱した議論が繰り広げられました。

口頭発表は軸索やシナプスなどに着目した神経発生に関する話題が多めでしたが、分子の機能解明のためranscriptome を用いる研究から行動実験を行う研究まで、具体的な内容は非常に多岐にわたっていました。新鮮に感じたのは、前の黒板に Twitter のハッシュタグ

#cshlneurocon と 'Tweetable' かどうかが提示してあつたり、meeting のことを積極的に SNS などで発信してほしいという旨のスライドが休憩時間中流れたりと、外部に向けての発信を精力的に促進している点でした。参加者以外にもより多くの人に meeting や研究へ興味を持つもらうための、個々人の働きかけの重要性に気付かされました。

私は 3 日目にポスター発表を行いました。私は視床下部神経の活動調節メカニズムについて研究していますが、まだ詳しい分子機構にまで踏み込めておらず内容に興味を持つてもらえるか不安でした。しかし発表時間が始まると少しづつ人が来るようになり、中には似たような現象を見たことがあるという方もいて思いがけず詳しく議論することができました。また軸索ガイドンスやシナプス刈り込みなどを専門とする、普段は接点の少ない研究者の方々に